

あとがき

人文科学研究所長 大野 俊

『清泉女子大学人文科学研究所紀要』第四十四号をお届けする。本号には論文八編が収録されている。著者の内訳は、本学の専任教員五名(うち所員三名)、非常勤教員二名、客員所員一名である。

掲載論文はすべて査読を経ている。応募論文八編中、二編を「条件付き掲載可」、六編を「掲載可」とした。応募者に対しては採否の結果をお知らせするとともに、査読者の所見を通知した。

今号から編集委員長が本研究所前所長の木村琢也教授(スペイン語スペイン文学科)に交代し、ご多忙なか、要領良く編集作業を進めてくださった。そして、今号も多くの関係者がそれぞれの専門知を結集し、刊行にこぎつけることができた。寄稿してくださった先生方はもちろんだが、短期間に真摯に査読をしてくださった匿名査読者の先生方、精緻な英文校閲をくださった匿名校閲者の先生、さらに執筆者、査読者、編集委員、印刷所の間の複雑な原稿やメールのやり取りを取り仕切ってくれた人文科学研究所職員の永塚尋子さん、これまで同様高品質な印刷と製本をしてくださる丸善雄松堂株式会社の担当者に改めて深謝を表したい。

私は二〇二二年四月から本研究所長を務めているが、本紀要に寄稿の論文を載せて頂くのも、この「あとがき」を書くのも今号が初めてである。そこで自己紹介もかねて、以下では、私の研究の主な分野である「社会科学」と、本研究所の名称にもなっている「人文科学」の境界など、実は結構、カオスに満ちている文系

学問分野の分類に関する私見を述べさせていたいただきたい。

私の大学院博士課程時代の専門は「東アジア・東南アジア地域研究」である。PhD(博士号)を授与してくれたオーストラリア国立大学アジア学部の大学院は、専門の地域の名称入りの学位を出す。私は、日本(東アジア)とフィリピン(東南アジア)間のひと(フィリピン日系人)の国際移動に関する論文を書いたために「東アジア・東南アジア地域研究」という長い学位を頂戴した。

日本では「地域研究」の歴史が浅く、この学位を卒業生に与えている大学は多くはない。大学関係者も、この学位名には余りなじみがない。文部科学省の学科系統分類表(文系分野)で数百ある小分類を点検しても、「地域研究」という言葉は見つからない。

そこで、私は日本では、自分の専門のテイシプリン(学問分野)について「国際社会学と歴史学」と説明することが多い。私が博士課程とPhD取得後に国内外の大学で研究職・教職を得て進めている移民研究やその理論は国際社会学の範疇である。一方、私がPhD論文でも扱った戦前期の日本人移民に関する調査は、多様な官民の多数の文書を渉猟する歴史研究でもあるからである。

国際社会学、さらにはその上位の社会学が社会科学の重要なジャンルであることは疑いない。文部科学省が公開している学科系統分類表によると、「社会科学」のなかで「社会学関係」の小分類(学科)は八九もあり、商学・経済学関係に次いで多い。

では、社会学のすべてが社会科学で、人文科学ではないのかというと、実はそうではない。文部科学省の「人文科学」の分類表をみると、中分類の「史学関係」のなかの小分類として「歴史社会学」がある。歴史社会学は、大ざっぱに言うくと、歴史を対象として社会学的考察を行う社会学の一部門であり、私のPhD論文の

半分以上は歴史社会学の範疇にも入る。「歴史社会学」は「社会学」の分類表のなかで「社会学関係」の小分類の一つでもある。つまり、私がやってきた歴史社会学的な研究は、社会学と人文科学の両方にまたがっており、どちらか一つの分野と言いがたい。

文部科学省は「人文学」と「社会科学」の違いなどを論じた文書「人文学及び社会科学の学問的特性」という文書を公表している。ここでいう「人文学」は先の「人文科学」と同義に用いている。そこでのポイントは、人文学が人間の精神や文化を主な研究対象とするのに対し、社会科学は人間集団や社会のあり方を主な研究対象としていることである。ただ、実際の現場での研究の対象は、その両方にまたがっているものも少なくなく、明確な線切りが困難なケースも多いとみられる。

ところで、本学の人文科学研究所には「規定」があり、本紀要の奥付にそれを載せている。その第二条では「本研究所は、人間にかかわるすべての現象を包括的かつ総合的に研究することを目的とする」と定めている。この規定にしたがえば、本研究所は人文学と社会科学の両方の研究を扱うほか、自然科学の研究も人間がかかわる現象を扱うものならば、紀要など研究所の刊行物への寄稿や主催する研究懇話会での話題提供を歓迎するべきだと思う。本研究所は一九七八年設立で、清泉女子大学の研究所の中でも長い歴史を持つ。文学部のみの本学の内部に学際的な機運を高め、外部からの新風を自由に迎え入れる目的で設立された。その当時の本学は、国文学科（現在の日本語日本文学科）、英文学科（現在の英語英文学科）、スペイン語スペイン文学科、キリスト教文化学科（現在の文化史学科）の四学科体制だった。文学や文化を学問の中心とする大学だったため、「人文科学研究所」という名

称に対して学内からほとんど異論は出なかったのではないか。当時、学外にいた私は、そう推察している。

清泉女子大学創立五〇周年にあたる二〇〇一年、本学に地球市民学科が新設された。この当時、「地球市民」や「地球市民学」という言葉が巷間で使われることは余りなく、相当に奇抜な印象を与える学科名だったのではと思われ、学科創立に関わった本学教員からもそのようなうかがっている。

ところが、先述の文部科学省の社会科学の学科系統分類表で「社会学関連」の小分類の中に「地球市民学」がちゃんと存在している。日本政府がすでに認定している学問分野ということで、地球市民学は日本でも「市民権」を得たと言えるだろう。

私は地球市民学科に二〇一二年から所属している。この学科の他の専任教員の専門分野は、国際関係論、文化人類学、環境経済学、社会デザイン学、平和学と、多様である。これらを人文科学と社会科学のどちらかに分けるとすると、はじめの二つは人文科学、残りの三つは社会科学と思われる。ただ、同僚の教員たちが自分の研究を「人文科学」あるいは「社会科学」のどちらかに位置づけているのかというと、それは疑わしい。というのは、教員の専門分野をよく見ると、先述の専門以外、地域研究、情報社会論、NGO論など、他に二つ三つの専門があり、「人文科学」か「社会科学」かの分類が難しくそうなケースもあるからである。

学問の分野は時代とともに移り変わり、その垣根が溶解し、新たな分類が必要になるときもある。将来的には、文系分野を「人文科学」と「社会科学」に分けること自体がナンセンスになる可能性だってある。本研究所の名称を再検討するときも、そのうちやってくるだろう。